



## マレー農村にて

加藤 剛\*

「昔の村の生活は、今に比べればずいぶん不便だった……。うん、道路？もちろん、舗装された道などなかったよ。雨期の時なんかはとくにひどかったねえ。とにかく赤土のティガ・カキ（3フィート）幅の道が泥んこだ。自転車にも乗れやしない。普通なら人間が自転車に乗るが、雨の日は自転車が人間に乗ったものさ。ウワハハ」

自動車を担ぎながら、滑べるまいとへっぴり腰で泥道を行く人の姿が彷彿とする。表現豊かなクディン老の話し振りにつられ、私も思わず笑ってしまった。

ところはマレー半島のヌグリ・スンビラン州。調査のため、この二年ほどの間に合計五カ月近く過ごした村でのことである。つい最近も、今年の一月初旬まで二カ月ほど滞在した。クディン老は推定年齢70代前半。記憶力が比較的しっかりしており、また歴史的センスが滅法よい。物事は変化するものだ、ということを充分心得ている。昔の話を知りたいときには、よく彼の家にお邪魔した。

クディン老の話を待つまでもなく、この半世紀、そしてとくにこの20年ほどの村の変化には驚くべきものがある。道路の話が出たついでに、これを例に、もう少しこの辺りの変化の過程を振り返ってみよう。そもそも、クディン老の両親の時代には、村には道らしい道は存在しなかった。畦道や「人間の肩幅ほど」の狭い道が、屋敷地、田、森林の間をつないでいただけだった。前述のティガ・カキ幅の道さえも、カキ（足つまりフィート）という単位からわかるように、そもそもは19世紀末にイギリスがつくったものである。

昔は村では靴など履くことはなく、人々は「ニワトリの足」（カキ・アヤム）、つまり裸足で歩いていた。ニワトリの足とは言いで妙で、ニワトリは靴を履かないのは勿論のこと、裸足で生活し

ている人の足指は、通常ニワトリのそのように広がっている。

裸足で外を歩く以上、それも未舗装のほこり道、泥道を歩く以上、高床の家に上がる前には、階段の下で足を洗わなければならない。足洗い用の水を入れた容器も、時代によってさまざまである。昔は、この容器は、木製の階段——より正確には梯子——の横に置かれたゴポン（gopong）と呼ばれるヤシ殻容器か、カンチュン（kancung）という節を抜いた大きな竹筒だった。

これに変化が起こるのは1920年代から30年代のことで、中国製の壺が“高級”水貯め容器として出回り始める。元はといえば、これらの壺は、醤油や漬物を入れて中国南部からシンガポールやマラヤに運ばれたものらしく、使用済みの一部がマレー農村にまで売られるようになったのであろう。壺から水をすくう道具には何を使ったかという点、これまた当時農村部にまで姿を見せ始めた缶詰製品の空き缶である。カキ・アヤムが依然として優勢な村の中にも、この頃になると木製サンダルや革靴を履く人が出てきたようだが、しかし履物は村ではまだまだ一般的ではなかった。

壺のあとにやってきた“高級”水貯め容器は、コンクリート製の階段に付随してつくられるようになった水槽である。比較的裕福な家庭に限られていたとはいえ、セメントの普及とともにトタン屋根の普及がその背景にあった。1950年代のことである。なぜトタン屋根と対かという点、コンクリート製の水槽は屋根の庇の下に設置され、トタン屋根を流れる雨水を下で受け止めるような仕掛になっていたからである。それまでのニッパ椰子の屋根では、なかなかこうはいかない。ついでながら、この時代前後から、厚板が建築材として普及するようになった。それまではといえば、丸太柱、ニボン椰子、竹、ニッパ椰子などが主たる建築材だったのである。

\* Tsuyoshi Kato, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.

トタン板を使った“自動給水装置”の例が、別掲の漫画にみられる。マレーシアで最も人気のある漫画家ラットの漫画物語『カンポン・ボーイ』(田舎の子) からとったもので、1950年代半ばのペラ州の彼の生家の様子を表している。トタン板の樋を複雑に組み合せ、この場合は壺に雨水を貯めるようになっている。壺の脇には柄杓がわりの空き缶が、短い杭の上に引っ掛けてある。

上記のような変化がみられた間、村の道は、その幅こそ少し広がったとはいえ相変わらず未舗装の赤土で、雨期ともなれば牛車(現在まで100年ほどの歴史)も自転車(同70年ほど)もあまり役に立たず、人間の足こそが村内でもっとも信頼できる交通手段だった。

最近15年ほどの間に建てられた家には、コンクリート製の水槽などはついぞみかけられない。そればかりでなく、水槽のある家においてさえ、今では水槽の中身は空っぽである。なぜかという、ゴム草履——当初は日本製で今でもサンダル・ジュプンの名で知られる——が、村の人の日常的な履物となったこと、そしてなによりも、村道をふくめた道路一般の舗装が進んだからである。今

では、雨期のときでも足が泥まみれになる心配はさらさらなく、「家に上がる前に足を洗う」という習慣は、完全にといいほど消滅してしまった。

私の近年の関心は、上のようななんでもない生活用具や生活様式の変化を再構築しながら、村と外界との交流、村人の世界観の変化をも視野にいたれた村の「生活史」を書くことにある。足を洗う習慣の歴史一つをとってみても、なんといろいろなこと——例えば物質生活の向上、道路の改善、外からのモノの流入——がみえてくることか。

当然のことながら、こうした興味に直接応えてくれる文書・文献は少ない。というわけで、クディン老のような年寄りとの昔話が、調査をしている時の主な日課となる。

クディン老と最後に話をしたのは去年の二月。帰国のためクアラルンプールまで自動車を運転して行く私に対し、「安全運転で行きなさいよ」と言ってくれたのを、今でもよく覚えている。その老もその半年後に亡くなった。今回の調査では、人生の先達を失ったような寂しい気持ちを味わうこととなった。

(京都大学東南アジア研究センター助教授)



Lat 作 *The Kampung Boy* (Kuala Lumpur: Berita Publishing Sdn. Bhd., 1979) より